

ソ連崩壊
から15年

「極東のまちでも変化のうねり」

岸部市長、吉岡議長らがロシア・ハバロフスク地方を訪問、視察研修

ロシア・ハバロフスク地方との交流のため、岸部市長と吉岡議長、市国際交流協会(伊東雅晴会長の会員らが8月4日から8日までの5日間同地方を訪問し、視察研修と交流を行いました。

その概要を、前号に続き吉岡議長の報告でご紹介します。

ハバロフスクを訪問して (後編)

北秋田市議会議員 吉岡 興

■大規模農場

市街地から10キロくらい離れた農場を見るためバスは未舗装道路を走ります。日本でもあまり走ることのない「砂利キャンド」をなぜか懐かしく思いました。

訪ねた農場では豚が100頭ぐらい、乳牛が約30頭、綿羊(山羊?)が10頭ほど飼育されていました。が、飼育環境は不潔そのもの。糞は垂れ流しで処理機能は無く肌にかびりついています。悪臭のため気分が悪くなるくらいです。



▲農場の豚舎。飼育環境はあまり良いとは言えない

その反面畑は綺麗で、キャベツだけで4haもあるといいます。そのほかジャガイモ、トマト、キュウリなど品目も多く、農場全体の広さは約200haもあるそうです。

これを家族3名使用人4名計7名で経営しているということでした(しかし、とてもその人数で管理できるとは思いませんでした)。

* *

連邦崩壊後国営事業はかなり民営化されており、農業でも私的所有が認められるようになり、個人の農

地は個人に所有権が与えられ、自分の土地での農業(菜園)も盛んになっているらしいのです。

国営農業から大型個人農家へ、そして小規模個人農家へと形態が変わりつつあるように思われました。

■教育

少子高齢化現象は日本だけではなくロシアでも同じです。ハバロフスク市の人口は約60万人だそうです。50万を割るのも時間の問題だろうとみられているそうです。

ロシアの義務教育は11年間でその内訳は1年から4年までが小学(初等部)、5年から9年までが中学(中等部)、そして10年から11年までが高校(高等部)です。小、中と区切らず7年生、9年生という呼び方をする一貫教育で高校を終われば17才、その後上級は大学が5年間、大学院は3年間の修学年数だといいます。

学期は2学期制で9～12月が1学期、2週間の冬休みのあと1～6月までが2学期、7～8月が夏休み。そのため今回訪問出来た学校は特別な学校しかありませんでした。

* *

「オーシャンレクリエーションセンター」という名の学校は別名「林



▲幼稚園の子どもたち。日本人のお客さんに興味津々

クルグリコフ氏は「日本の物は良い。今やブランド品である。高いけれど良い品だ、という風潮が芽生えている」と話します。

医療研修センター長のソレイマノフ先生は「日本の医学は素晴らしい。研修のため日本へ渡る医学の留学生が増えているが、住みやすいのか帰って来ない」と嘆きます。そうやってみると日本という国はまんざらでもないと思ってしまうのです。

* *

いま秋田県では「シアンドレール」計画を推進しています。つまりロシアの極東地区との交易を進めています。



▲県立医療研修センターでソレイマノフ所長(左)と日口の医療について情報交換した岸部市長

間学校」だといいます。夏休みを利用して希望者を募り社会教育をする学校です。市内各地から320名の子どもが集い20日間合宿をするといいます。そのほとんどが公費で賄われるということでした。

■医療

県立医療研修センターはロシア政府が作り予算は県が出す医師の研修機関です。「国立大学では生徒に授業はするが医師には教えない。医師も研究しない。よって勉強したい医師は県立病院に勤務する。そういう医師に研修させる場が研修センターである」とセンター長のソレイマノフ先生は言います。



▲日程の最後には日本人墓地をお参りました

所長はかつて弘前大学に留学したことがあるそうで、それを聞いた岸部市長は「同窓生」である親しみを感じ専門分野をいろいろと突っ込んだ質問をし、所長を喜ばせる一面もありました。

* *

施設を案内しながら所長は、「ここでは先端医学の研修が出来る」と胸を張り年間700名の研修生がいることを説明。医学が進んでいる日本に無い医師専門の研修機関が、どちらかといえば遅れているロシ

アにあるというのは意外ですが、遅れを取り戻すためだと思えば納得もいく話かもしれません。

■福祉

街を歩いていてオヤっと思うのは車椅子を見かけないことです。杖をついている人も「老人車」を押している人もいません。果たしてロシアという国は障害者や老人はいないのだろうか?それを裏付けするように建物に入るスロープもありません。坂も結構あり歩道も階段式になっていますがこれまたスロープがありません。つまりバリアフリーではないのです。

介護施設について尋ねたらガイドは「分からない」と答えます。「障害者は居ないのか、寝たきり者は居ないのか?」施設の形態は「定員は?」と立て続けに質問すると、「貴方の言っている意味はわかります。でも私にはどう答えていいのかわからないのです。スママセン」と困った顔でうつむくのです。

■おわりに

ハバロフスク日本総領事の貝谷俊男氏は「ロシア人は日本へ行きたがる。日本を高く評価している」と言います。また、商工会議所会頭の

今後ロシアとの交流は益々盛んになるかも知れません。そういう時期にハバロフスクを訪問出来たのはタイムリーであり幸せでした。

行程の最後に日本人墓地を参拝しました。古びた墓石、朽ちた標柱に合掌すると、再び戦争の文字が脳裏を駆け巡ります。と同時にロシアと国境を接していた中国の東安(現在の黒龍江省・密山市)で過ごした幼少時代がなぜか思い出されてなりませんでした。

このたびのハバロフスク訪問は、「戦争と平和」を痛切に感じた5日間でもありました。